



“Ph. Fr. von Siebold’s Letzte Reise nach Japan 1859-1862.” Berlin, 1903. (本学図書館所蔵)

年2月頃の日本に対するドイツの国内世論は決して良好ではなかったようです。これは、この時期が8月から始まる日清戦争の所謂、開戦前夜にあたり、他のヨーロッパ諸国と共に東アジアで利権を確立しようとするドイツに、「富国強兵」を掲げて台頭する日本への警戒心が芽生えていたことによります。従って、玉井が感じる危機意識を払拭するためにも日本の情報が必要であり、日清戦争も終わった1898（明治三十一）年に自ら筆を揮える場として、さらには日本とドイツの真の友好と通商の発展<sup>(2)</sup>を願って月刊のドイツ語東洋情報誌『Ost=Asien（東亜）』を創刊することになります。

### ■『東亜』から生まれた記念碑的著作

この頃のアレクサンダーにとって、玉井との出会いは大きな喜びであったと考えられます。自他ともに認める親日家として、自由に論陣を張れる絶好の場が生まれたのです。玉井にしても、日本の外交に関わったアレクサンダーが加わることで執筆陣が強化され、日本への理解が深まることに繋がるわけです。このように、二人の目的が一致して『東亜』の刊行が進みます。最終的にアレクサンダーは、刊行された全139号中、約90の号に執筆し、この雑誌の「論説委員の役割」<sup>(3)</sup>を果たしていたという見方さえあります。

こうしたアレクサンダーの貢献に報いるためにか、玉井は彼の著作を発行するようになります。現在、彼の単行本は9冊あると確認されており、その内の3冊の刊行に玉井が関わっています。中でも代表作とされる“Ph. Fr. von Siebold’s Letzte Reise nach Japan 1859-1862.”（『フィリップ フランツ フォン ジーボルト最終日本旅行』）（写真）は、父のフランツとアレクサンダーが日本に滞在した安政から文久年間の

様子が書かれたもので、1903（明治三十六）年にベルリンで発行されています。本書の日本語訳者である斉藤信氏は、出版の経緯を「（前略）『東亜』に連載したものを、さらに一本にまとめたものと思われる」<sup>(4)</sup>と述べ、論文から著作に発展したものと考えています。

本書は序文と目次が9頁、本文は130頁で構成されているもので、けっして大著ではありません。しかし、標題紙のドイツ語と併記された日本語書名からは、日本を愛する著者とドイツ人を尊敬する日本人発行者の強い絆が窺え、まさに江戸時代末期にドイツ人の親子が日本と交流した結果を纏めた記念碑的な書物と捉えることができます。

なお、本学図書館所蔵本の標題紙には、著者アレクサンダーのものと思われる筆跡で“Ree, from the author”と献呈の日付“9-2-03”が記入されています。

### ■玉井の没後も執筆を続けて・・・

玉井とアレクサンダーの協力で進んでいた『東亜』の刊行は、1904（明治三十七）年から2年にわたる日露戦争の期間を越えて進み、ドイツ人の対日理解の向上に貢献しました。しかし、この戦争が終わった翌年の1906（明治三十九）年、玉井はベルリンにおいて40歳の短い生涯を閉じます。

同誌の刊行は後継者に引き継がれて暫く続き、この間アレクサンダーも健筆を揮いますが、1911（明治四十四）年に遂に力尽きて65歳で世を去ります。日本政府はその前年に勲一等瑞宝章を贈って、来日以来の長年の労をねぎらっていました。

二人が希求した日独両国の友好関係は、その後の第1次世界大戦の一時期を除き弛まず発展し続け、おそらく現在は彼らが掲げた理想を凌駕するほどの素晴らしい状況を作り上げているのです。

#### 主な参考文献と脚注

- (1) 1897（明治三十）年にアレクサンダーは第ハインリッヒと共に父の大著『日本』を縮小した第2版を刊行している。
- (2) 大島幹雄氏は『シベリア漂流－玉井喜作の生涯』で『東亜』に占める日独企業広告の多さを指摘し、刊行数は5000部以上と見ている。258-259頁。
- (3) 泉健「文献に見る玉井喜作-没後100年を記念して」和歌山大学教育学部紀要 人文科学 第56集25頁。
- (4) A.ジーボルト(著) 斉藤信(訳)『ジーボルト最後の日本紀行』平凡社(東洋文庫 398) 209頁。

おく まさよし（司書・図書館事務長）